

お前のせいじゃ！！

サンゴ礁

目の奥に焼き付いては消えない光景がある。
まだ幼い時だった。一人家を抜け出し、遊びつくした日。太陽が落ちきって、怒られるだろうかと不安を覚えながら家に帰った日。

いつになく静かな霧囲気の家だった。バレていないのかもしれないと沈みそうだった気持ちを上を向いたとき、誰かが玄関から出てきた。家の影が被さり姿かたちは判然としない。その中で腰に提げた刀が見えたので、すわお侍様かと、駆ける手前の速さで近づいた。顔がぼんやりとでも見えるその距離でいやに光る目が、影の中でも失われぬ光が、私を見下ろしていた。生温く冷たい空気が、私の肌に溶けた蠟燭のようにまとわりつき、体の中身が押し上げられるような強烈で、自由の効かない緊張が身体中の動きを停めてしまった。

目の前にまできたその人は、数秒の間立ち止まると、変わらずに進み始めた。その目は私を見てはいなかった。

その後のことはあまりよく覚えていない。確かに体験したことだが、どこか他人事のように浮ついた事実だけが残っている。

家に着くと、家族は全員息絶えていた。両親の葬式で噂されていたのは、少し前から巷を賑わせている人斬りの仕業じゃないか、という話だった。

あの日すれ違った人について、誰かに話すことはなかった。人相を伝えられるほど顔が見えたわけではないし、なにより上手に話せる気がしなかった。

唯一の生き残りとなった私は、親戚に引き取られた。適度な距離感でよくしてくれたと思う。ただ、幼いと言えど分別のついた時分に引き取られたとなれば、いつまでも世話になるのは気が引けた。大人として扱われる齢になつてすぐ、宿舎つきの官庁に採用をもらい円満に飛び出した。

さて、それで今だ。
何も宿だけが目当てでこんなところに来たわけではない。人斬りとして名が流れているのなら、当然手配もされている。直截に言おう、彼の人斬りが捕まって、今現在この官庁に放り込まれている。

なぜ、自分は今こんなところにいるのだろうか。

捕まって、牢に放り込まれて、さて刑に処されるのはいつだろうかと考えていたまではよかった。

なぜか官吏の男に脱走させられた。すでに街から離れた森の中。普通になぜ？ 目の前を走る男を見

る、枷に繋がれたままの両手、抗うすべもなく、引つ張られるままに自分も走る。自分が考えたところで、どうにもならないかと一先ずの結論を出し、何も考えずに流れに身を任せる。

結構な時間を走ったか、突然立ち止まった官吏の男は息が上がっていた。

「待っていてください」と言われ腕も放された。木のうろに手を伸ばししゃがみ込む男は、隙だらけだった。腰に提げられた刀を見る。少しして、あるうことか男はその刀を地面に置いた。畏、だろ。だが畏だとして、目的は？

結局自分は、人を斬るしか能のない狗。男はうろの中に夢中のように。畏だとしても、先に殺してしまえばいい。自分にはそれができる。決めてしまえば早い。刀を取ると、鞘を飛ばし首筋に沿わす。あつけない。

「動いたら殺す。質問に答えろ。目的は何だ」

「……別に、貴方を逃がそうかと」

「それは何故だ」

「知ったところで、どうするんですか？」

「……お前、俺に家族を殺されたんだろう。逃がした先で俺を殺そうってんじゃないのか」

「……貴方を私が殺せると思いますか？」

「いや思わんが。だからこそ不可解だ」

「私は貴方を殺したいとも、復讐したいとも思っていないせんよ」そう言っつて男は振り向いた。刃と逆とはいえ、一筋斬れている。自分の身体は動かなかった。ただ純粹に不気味で、ここで殺して正解を知ることができなくなれば、一生残る重石になると思つたからだ。いや、気圧されている？

「確かに、私は家族を貴方に殺されました」

「でも、もうどうでもいいんです。貴方を殺したところで家族は戻りませんし」

「……」

「それよりは、貴方の目を一生の肴にでもした方が有意義だ」

「はあ？」

「私はね、家族を殺された日、人を殺してすぐの貴方に会った」

「あの時初めて私は人殺しの目を見たんですよ」

「なのは何だ、今の目は。そんな目で私を殺そうとしたのか」

「ん、？ ん？？ え。何」

「私を殺すときは、もっと殺意を込めて、あの目で殺してください」

「ほら、理由を聞いても分からないでしょう」

「私は、貴方を生かそうと思っつて、というこどです。」

「今後の事もざっくりとですが考えていますよ」

「はあ……」

「手始めにこの国から出しましょう。二個隣の国はここより治安が悪い。そこで用心棒として雇われる、のを一旦の目標としましょう」

「……俺の利点は？」

「貴方、その国の言葉分かります？」

「私は通訳、貴方は用心棒。私も最低限の身なら自分で守れます」

そう言って、どうです？ と男は笑った。

ずっと、刃を突き付けられながらニコニコと笑う男。なぜに返された理由もよく分からない。ただ、目の前の男が語る展望は、物事をよく知らない自分が、悪くないと感じた。……今までと形が変わるだけで、自分の腕が買われたことには変わらない。

俺は刃を下ろした。

まさか私が生き残れるとは。だが、あの目に殺されていたら、一生成仏することはなかっただろう。

あの時、私の網膜に焼き付いたあの目を見るまでは死ねない。